

《好き》を《仕事》に ――経験を活かして生きていく――

イキテイク合同会社代表社員 柴山 琢磨

博多港まで高速船で約一時間と、長崎県で最も福岡に近い壱岐島。長崎への航空路もあり、数ある離島の中でも、都市へのアクセスに恵まれている島のひとつだと思います。私は、この島で「イキテイク合同会社」という会社を令和元年五月に立ち上げ、代表社員を務めています。

起業以前、私は壱岐市役所職員として一四年九カ月間にわたり働いてきました。周囲からは「どうして安定している市役所を辞めてしまったの？ 一生安泰の公務員なのにもったいない」といった言葉をよくかけられますが、この決断に後悔はありません。

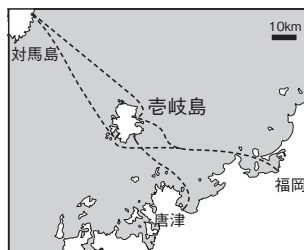
本稿では、私が市役所を退職までして「イキテイク」を設立した経緯や、複数の仕事を組み合わせながら生計を立てている、現在の楽しい暮らしについて紹介いたします。

安定を求めて公務員に

私は、壱岐島のほぼ中央に位置する住吉山信^{すみなしやまのぶ}という、山々と田畑に囲まれた場所で生まれ育ちました。島内でも高齢化率が特に高い地域で、現在、子どもがいるのは一世帯のみです。しかし、一帯は盆地となっていて、昼夜の寒暖差により「山信の米は、壱岐で一番美味しい」といわれるほど、実り豊かな地区として知られています。

幼少期の私は、とにかく「質問魔」で親戚を質問攻めにしていたと聞いています。少し歳の離れた兄たちの素行を見て処世術を学び、大人になるまで一般常識を外れないような「普通のいい子」に育ちました。

地元の高校を卒業後、長崎大学教育学部に進学。それまで島で見たことのないような服装、聞いたことのないよう



壱岐島：玄界灘にある面積134.63km²の島。人口25,714人(令和2年11月末現在)。古くから大陸文化の中継地とされ、「魏志倭人伝」には「一支国」と記される。国内最大級の弥生環濠集落「原の辻遺跡」をはじめ、縄文・弥生時代の遺跡が多い。

な生き方の多様な人々と出会い、自分の中の常識があつざりと覆されました。「普通」の基準は、人それぞれである。これが最初の価値観の変革となりました。

大学卒業後は、公務員専門学校へ通いました。振り返ると「教師になって人を育てるより、町づくりに関わりたい」という建前のもと、じつは「公務員になって、安定した給料を」を本音に、公務員を目指したように思います。複数の自治体の試験を受けましたが、採用となったのは、両親も勧めてくれた壱岐島の旧芦辺^{あしべ}町役場のみ。悩んだ末、故郷である壱岐へ帰ることを選択しました。紆余曲折ありましたが、役場の業務や地域の青年団活動などを通して、島の自然や歴史・文化、人々の温かさなどに接する機会が増え、壱岐の魅力に改めて気づいていきました。

入庁一年後、島内四町の合併で壱岐市が誕生。市役所職員として、税務を六年、政策企画（情報政策）を七年、観光商工を二年弱ほど経験しました。公務員になった当初は、上司などに指示された仕事をこなしていくだけでしたが、次第に主体的に業務に取り組むようになりました。

市の職員として私が意識していたのは、ユーザー（市民）目線の仕事です。業務内容を常にバージョンアップ（改良・効率化）していけるように心がけ、実践を積み重ねることで、それが習慣化していきました。自分がわからないことはユーザーにも伝わらないと、書籍やインターネットで調べたり、少しでも煩雑な業務が効率化されるようにエクセルで

簡単なプログラムを組んだこともあります。法令解釈に納得がいけない時は、中央省庁の担当者に直接たずねたり、上司の考え方とズレがある場合は、ほかの実例を提示しながら自分の意見を主張したこともありました。昔からの「質問魔」が、「どうしたら現状がもっと良くなるのか」を問いつけた結果、このように成長したのだと思います。

しかし、いま振り返ると、当時は、自分は周囲よりも知識や経験が豊富だ、と思い込み天狗になっていた時期でした。この認識を新たににしたのが、滋賀にある全国市町村国際文化研修所の人材育成プログラムで、全国の税務課職員と一緒に一週間ほどの研修に参加した時でした。初めこそ大勢の公務員の中で率先して発表していましたが、徐々に課題研究についていけなくなりトーンダウンしてしまいました。多くの知識や経験を有する方々と出会ったことで、「上には上がある」ことを実感しました。

壱岐の情報化の推進に尽力

政策企画課では、市の情報政策を担当しました。市役所庁舎はもちろん、小中学校や幼稚園・保育所、消防署、市の出先機関などに五〇〇台以上あるパソコンやそれに付随する機器やソフトを、上司を含めて三人で管理しました。PCやネットワークに関しては、素人同然でしたが、この業務を通じて徐々にスキルが身につく、いつの間にか役所の中でも「ITに詳しい人」とみられるようになっていました。

平成二二年、翌年からの地上デジタルテレビ放送の開始にあわせて、①難視聴地域解消、②超高速インターネット網の整備、③防災放送システムの更新、④コミュニティFMラジオ局の構築を軸とした「彦岐市地域情報通信基盤整備事業（彦岐市ケーブルテレビ事業）」が始まります。彦岐市政最大の約四六億円の総事業費（約九五パーセントが国の交付金など）で、半年間で市内約一万二〇〇〇戸すべてにケーブルを配線し、機器を設置するという大変なスケジュール担当職員は三人体制のままだったので、朝から晩まで働きづめとなるなど、目まぐるしい忙しさでした。時には住民の皆さんから、厳しいご意見をいただき、精神的に落ち込むこともありましたが、いたわりの声をかけていただくこともあり、「いま自分がやっていることが彦岐市の未来につながる」という思いで、なんとかスケジュール通りに仕事を進めていきました。

工事が佳境を迎えた平成二三年三月一日、東日本大震災が起きました。津波にのみこまれる東北の町の様子をテレビで見ながら、「ケーブルテレビがあれば、市民に情報をいち早く伝えることができる。島の方々の暮らしがより豊かに、安全になる」という思いを強くしました。同時に「人生にはいつ不幸が訪れるのかわからない。自分らしく生きるとはどういうことなのか。悔いだけは残したくない」と、自分の生き方を見つめ直すきっかけにもなりました。

同年四月に彦岐市ケーブルテレビが開局。その後、公共

施設へのWiFi整備、市民向けタブレット教室やプログラミング教室の開催など、ITを通じて地元の皆さんとコミュニケーションを取ることにやりがいを感じるようになりました。市の外部機関で「予算がないのでウェブサイトがつかれない」と相談されれば対応し、市の移住ポータルサイト「いきしまぐらし」やふるさと納税サイトの構築も手掛けました。気づけば自分の仕事ぶりや彦岐の魅力をSNSで発信するようになっていました。

ケーブルテレビによって、彦岐の情報化は格段に進み、ITを活用して仕事をする環境も整いました。現在ではコロナ禍を機に、テレワークやワーケーションの取り組みが急速に進んでいます。私自身は、この時から「彦岐のIT環境が整ったから、これからはそれを活かす企業や人材が重要だ。その人材に自分になってみたい」と、起業を意識するようになりました。

好きなことを生業に、起業

市役所を退職することに対する不安は少なからずありました。しかし、このまま働き続けて、家を建て、子どもを育て……という、いわゆる順風満帆な人生を定年まで送ることに、ある種の物足りなさを感じ始めていました。

ちょうどその頃、平成二八年に観光商工課へ異動。国土交通省離島振興課が主催した島と企業のマッチングイベント「しまっちんぐ」の市の担当者となり、東京で島のプレ



国交省主催の「しまっちんぐ」で壱岐を紹介。Yahoo!の
本社ビルにて。

う」と訴えました。細かなデータを並べるより、その島や住民がいかに面白いか、まずは興味を持ってもらおうと考えたからです。その結果、発表後の名刺交換は分刻みとなり、トランク一杯に詰め込んだ焼酎と壱州豆腐を肴に、どんな話を進めていきました。

イベントでは、ウェブ制作会社の(株)LIGと意気投合(マッチング)し、平成二九年一月に、ふるさと納税のPRとリモートワークの実証実験イベント「どこでもオフィス」を一週間ほど共同で開催しました。役所組織とはまったく異なる民間企業の様子(リモートワーカーたちの自由な働き方や考え方、仕事のスピード感など)を目の当たりにし、大きな

ゼンテーションを行ないました。「壱岐市って面白い！」を前面に出すコンセプトのもと、写真を見せながら、会場に集

まった参加者との相互交流ができるようにプレゼン内容を構成、「詳しいことは、持参した壱岐焼酎や島の美味しいものを交えて話しましよ

衝撃を受けました。さらに、「どこでもオフィス」の期間中に、LIGが壱岐に拠点を構える話にまで発展したことも驚愕でした。翌三〇年、同社が島内の旧勝本町に開業した「ゲストハウスLAMP壱岐」は、現在、旅行者が行き交う場所となっています。

平成二九年の一年間は、壱岐と東京を行き来することが多く、さまざまな方や企業とのつながりも増えていきました。壱岐の名産品をトランクに詰めて、隙あらばPRすることを心がけ、自費で公務員が集まるイベント「よんなな会」に参加したこともありました。浅草の商業施設に壱岐市として初となる物販ブースを設けたり、テレビや雑誌の取材に積極的に応じるなど、公務とプライベートの境界があやふやになっていった時期でもあります。個人的には、「壱岐のためになるのであれば、すべて仕事だ」という気概で取り組んでいましたが、周りからは「変わった公務員」と見られていたかもしれません。やりたいことと、やっていることのギャップや周囲の視線などに悩むことも多く、精神的に不安定になっていきました。

ある日、母校で駆け回る子どもたちの姿を見て、「自分は、この子たちに何が伝えられるだろう」と考え、「今後は、自分にしかできないことや、好きなことを生業にしていこう。一度きりの人生、後悔はしたくない。起業しよう!」と、覚悟を決めました。平成二九年に市役所を退職し、「イキテイク」を立ち上げ、令和元年に法人化しました。

行政経験を活かした仕事づくり

「人生一〇〇年時代」といわれる中で、安定した給料や身分保障よりも、自分がやりたいことや好きなことを仕事にしたい。自分の活動の先に「壹岐が良くなる」という未来を創造したいと考えています。

現在は、〇〇屋さんや銘打っていないので、「何の仕事をしているのかよくわからない」と、いわれることも少なくありません。実家を改修した「いいオフィス壹岐」を拠点として、ウェブサイトやチラシなどを制作するウェブデザインを主業としています。ほかにも、写真や動画の撮影、子ども向けロボット・プログラミング教室の運営、イベン



実家を改修した「いいオフィス壹岐」。



「いいオフィス壹岐」は、事務所だけでなく、住民や事業者が集まる場にもなっている。

トの企画やコワーキングスペースの運営、ライティング、自社商品やリユースパソコンの販売、モバイルネットワーク販売代理、竹あかり（照明エクステリア）制作など、さまざまな仕事をこなしています。できるだけ島内で競合しない分野で活動しようと気をつけながら、島に必要だと感じたり、自分がやりたい仕事に取り組んでいる形です。

公務員経験を活かし、役所と市民、島内外のつなぎ役のような役割を担うこともあります。また、拠点に来た方との出会いで仕事が生まれたことや、駆け込み寺的に島の事業者から相談を受けたこと、行政経験を活かした補助金申請などのコンサルティングなどを請け負ったこともあります。勤務時間は自由です。組織のように出勤時間が定められていないため、いわゆる「働かされている」という感覚はまったくありませんが、その分、スケジュール管理が重要になります。何をするにも自己責任で、独りですべてを行なわなければならず、手が回らなくなることもあります。公務員の頃と違って、収入は上下に振れますが、おかげさまで不自由な暮らしにはなっていないません。どうしてもやる気が起きない時は、ハンモックでゴロゴロしながら、猫と遊んで気分転換をすることもあるくらいです。

「半農×半IT」の実践を目指して

娯楽が少ない島にエンターテインメントをもたらすことも私の使命だと感じています。直近三年間では、四十年間



屋外での映画上映+αの交流を生み出した「彦岐星空映画村」。

ほど途絶えていた花火大会の復活、芸人で絵本作家の西野亮廣氏の講演会、星空の下での映画上映「彦岐星空映画村」の開催など、いくつかのイベントに取り組みました。また、今年度はコロナ禍で公的なイベントのほとんどが中止・延期となっている中、島の方々の協力を得ながら「彦岐島ふるさと花火」を開催（本誌二六三号グラビア参照）。地元の方々の笑顔づくりや彦岐市の全国的なPRに貢献できたのではないかと感じています。

「それいいよね。面白いよね」というアイデア段階から、「どうしたら実現できるか」という方法を探り、具体的な形に移していく。公務員時代から仕事に対するこの考え方に変わりはありません。今後も、彦岐はもろん日本の島々が面白くなるように、島のエンターテインメントを盛り上げていけるよう、活動を続けていきたいと思っています。

現在の目標は、これまで実践してきた事業を太く継続していくこと。そして「半農×半IT」の

暮らしを実践していくことです。両親も歳を重ね、農作業が辛くなってきました。実家（拠点）でITの仕事をしなが、農業ができるようにしていきたいです。

小さな仕事を組み合わせる複業のメリットについて、私の経験では、どれか一つがダメになってもすべてが立ち行かなくなるわけではないため、なんとか生計を維持していくことが可能なことだと思います。もちろん、複数の仕事を同時並行で進めていかなければならず、自分が倒れてしまつては元も子もありません（笑）。

彦岐に限らず、島で働くことには苦労が多いです。都会に比べて、賃金が安いという現実もあります。ただし、島にはそれらをカバーして余りあるくらいの人々の温かさや自然の豊かさがあり、仕事をつくり出せるポテンシャルも有していると考えています。



柴山琢磨（しばやま たくま）

昭和53年、彦岐島生まれ。大学卒業後、旧芦辺町役場（現彦岐市役所）へ入庁。以来約14年間、市の情報政策や地方創生などに携わる。平成29年12月に市役所を退職しイキテイクを創業、令和元年に法人化。ウェブデザイン、カメラワーク、コワーキングスペース・ロボットプログラミング教室の運営やイベント企画など、「自分の好きなことで生きていく」をモットーに、島内外問わずさまざまな活動に取り組む。平成31年、「月と島全国写真コンクール」最優秀賞受賞。